

### (3) 保育の計画と評価

---

保育園において、保育の目標を達成するためには、子どもの発達を見通しながら、計画性のある保育を実践することが必要です。

各計画の作成にあたっては、全職員が保育の理念や方針を共有しながら、保育の方向性を明確にし、発達や生活の連続性に配慮することや、育ちの見通しをもって子どもの実態をとらえる視点をもつことが必要です。

計画に沿った保育を実践し、その計画や環境構成等の評価・改善を循環的に行うことにより、柔軟な保育を展開しながらも、子どもの豊かな経験が着実に積み重ねられ、資質や能力が育まれていきます。

保育を進めるにあたっては、子どもに計画通り「させる」保育ではなく、子どもの状況や遊びの展開に応じて環境を適宜変えていく等、子どもの主体性を重視して、保育を展開していくことが必要です。

施設の規模や地域性などにより、行う保育は様々に異なりますが、このような実践を丁寧に積み重ねていくことで、現在を最も良く生き、望ましい未来を創り出す力の基礎が育まれていきます。

#### ア) 保育計画・評価

子どもの最善の利益を考慮し、0歳から6歳までの子どもの年齢に応じた発達の特徴や育ちの見通し、各保育園の理念や方針、浦安市の地域特性、「いきいき☆浦安っ子」などを反映させながら具体的な内容を考えます。

また、現在の子どもの育ちや内面の状態を理解し、今育ちつつある様々な資質・能力を十分に引き出せるような指導計画を作成することが大切です。

保育の計画とそれに基づく実践を振り返って行う自己評価は、子どもの生活や育ちの実態を改めて把握し、子どもの経験がどのような育ちにつながるものであったかを捉え直すために必要です。改善点を次の計画に生かす繰り返しの取り組みにより、子どもの内面や育ちに対する理解を深めるとともに、保育者の専門性を高め、保育園全体の質を向上させることが必要です。

1	全体的な計画は、園の方針や目標に基づき、子どもの発達過程を踏まえた保育の内容が、組織的・計画的に構成されている。	
2	全体的な計画は、保育園の生活の全体を通して、保育の内容が総合的に展開されるよう作成している。	
3	生活や発達を見通した長期計画（年間指導計画・期の指導計画・月の指導計画）や、具体的な子どもの姿（日々の生活に即した短期計画・週案・日案）を作成している。	
4	0, 1, 2歳児については、一人一人の子どもの発育や心身の発達、活動の実態、家庭環境等を踏まえて、個別の計画を作成している。	
5	3歳以上児については、個の成長と集団生活での成長を考慮して、発達の各時期にふさわしい生活が展開されるよう、指導計画を作成している。	
6	発達等の支援を必要とする子どもについては、発達の過程や状況を把握して適切な環境や援助等の個別の計画を立てている。	
7	発達等の支援を必要とする子どもの個別の指導計画は、職員間や家庭、関係機関との連携した支援のために適切に活用している。	
8	就学前教育・保育と小学校教育との円滑な接続が図れるよう、アプローチカリキュラム等に基づいた保育の計画を立てている。	
9	保育所保育指針等に示された「育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解し、就学前教育・保育の方向性や計画作成に取り入れている。	
10	児童票、園日誌（業務日誌）、保育日誌、保健日誌等があり、子どもの成長や日々の活動、保育の振り返り等を記録している。	
11	環境の構成や子どもに対する援助について改善すべき点を見出し、保育の改善が図られるよう定期的に計画等を振り返る機会を設けている。	
12	保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価をすることで、専門性の向上に向けた保育実践の改善に取り組んでいる。	
13	保育士等の自己評価は、子どもの活動内容やその結果だけでなく、子どもの心の育ちや意欲、取り組む過程なども十分踏まえて行っている。	

## イ) 乳児保育（1歳未満児）

乳児期は、視覚、聴覚などの感覚や運動機能が著しく発達します。また、特定の大人との応答的な関わりを通じて情緒的な絆が形成されます。保育士と子どもの関わりでは、積極的に言葉のやり取りを楽しむなど、愛情豊かで応答的な関わりがとても大切です。

また、疾病への抵抗力が弱く、心身の機能の未熟さに伴う疾病の発生が多いため、一人一人の発育及び発達状態や健康状態について把握し、職員間や嘱託医との連携を図ることも必要です。

安全が保障され安心して過ごせるよう十分に配慮された環境の下で、乳児が自らの生きようとする力を発揮できるよう、生活や遊びの充実が図られる必要があります。こうした乳児の育つ姿を尊重するために「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」といった視点と、養護及び教育の一体性を意識し、保育を行うことが重要です。

1	心と体の健康は、相互に密接な関連があるものと認識し、喜びや驚き、励まし等温かく共感した関わりをしている。	
2	発育に応じて体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにしている。	
3	月齢や年齢による一律の区分だけでなく、それぞれの発達の状況に応じた活動を取り入れ、落ち着いて過ごせる工夫をしている。	
4	健康な心や体を育てる上で、食習慣の形成が重要であることを認識し、離乳食から完了食へと移行する中で、様々な食品に慣れるようにしている。	
5	食べる喜びや楽しさを感じ、進んで食べようとする気持ちが育つよう、子どもと気持ちを共有しながら保育士等が一人一人に丁寧に関わっている。	
6	保育士等との関係に支えられて生活を確立していくことが、人と関わる基盤となることを認識し、子どもの多様な感情を受け止めている。	
7	人との信頼感を得ることを意識し、子どもの声や表情、仕草や動きなどにタイミングよく共感的に responding している。	
8	言葉を育て、人とやり取りすることの喜びと意欲を育むことを意識し、喃語や指さしなどを保育士等が共感しながら言葉に置き換えて伝えている。	
9	個人や月齢の違いによる発達差の大きい時期の子どもの探索意欲を満たすために、一人一人の子どもがどのようなものに興味があるのか理解し、遊びを通して感覚の発達が促されるよう工夫している。	
10	玩具を選ぶ際には、形や手触り、色合い、大きさや重さ、持ちやすさ、音の大きさや質など子どもの感覚や動きに照らし吟味している。	

11	一人一人が充実して遊べるよう、場所の広さや動線など空間の作り方に配慮している。	
12	子どもが感性や感受性を豊かにもち、表現する力を身に付けていくために、保育士等は表情豊かに接している。	



## ウ) 1歳以上3歳未満児

1歳以上3歳未満児の時期は、基本的な運動機能が次第に発達し、排泄の自立のための身体的機能も整うようになります。

また、食事、衣類の着脱など自分でできることも増えてきます。さらに発声も明瞭になり、語彙も増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになるのもこの時期です。思いや欲求を受け止めてもらう経験から他者を受け入れることができ始め、友達同士の関わりが徐々に育まれていきます。その一方で自分の思い通りにできず、もどかしい思いや、甘えたい気持ちが強くなります。

そのため子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに応答的に関わるのが大切です。

こうした発達の姿を踏まえ、保育内容を「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域によって示しています。これら5つの領域に関わる内容は、乳児期の3つの視点及び3歳以上児の保育内容における5つの領域と連続するものであることを意識し、この時期の子どもにふさわしい生活や遊びの充実を図られるのが大切です。

著しい発達が見られる時期ではありますが、個人差が大きく、生活や遊びの中心が、大人との関係から子ども同士の関係へと次第に移っていく時期でもあります。これらのことに配慮しながら、養護と教育の一体性を意識し、一人一人の子どもに応じた発達の援助が求められます。

1	子ども自らが体を動かそうとする意欲が育つよう、一人一人の発育に応じて体を動かす機会を十分に設けている。	
2	食習慣を形成するために、充実した遊びの時間と規則正しい生活リズムを意識して保育にあたっている。	
3	ゆったりと落ち着いた雰囲気の中で、友達と一緒に楽しく、進んで食べようとする気持ちが育つような援助を心掛けている。	
4	基本的な生活習慣の習得にあたっては、個人差や家庭の生活状況によって異なることから、一人一人のペースを尊重しながら援助している。	
5	排泄の習慣は、他の子と比べたり便器に座ることが苦痛となったりしないよう、焦らずタイミングよく誘うことを心掛けている。	
6	保育者への安心感を基盤に自分で何かをしようとする気持ちを見守り援助している。	
7	子どもの様々な感情を受け止め、立ち直る経験や感情をコントロールすることへの気付きなどにつなげていけるよう援助している。	

8	友達の気持ちや友達との関わり方に気付けるよう、葛藤が生じた時など双方の思いを大切に、対応している。	
9	子どもが自分なりの発想や工夫で楽しみ、感覚の発達が進められるよう、子どもの発達に即した形や大きさ、色合い、音量等の玩具が用意されている。	
10	生き物に対する温かな感情が芽生え、命の尊さに気付けるよう、生き物との関わり方を具体的・実践的に伝えている。	
11	季節や文化を取り入れた、遊びや行事を体験できるようにしている。	
12	言葉で思いが通じ合う喜びを感じ、伝える意欲が高まるよう、楽しい雰囲気の中で保育士等と言葉のやり取りをしている。	
13	相手にも気持ちや思いがあることに気付いたり、受け止めたりできるよう、保育士等が仲立ちして気持ちや経験等の言語化を援助している。	
14	遊びや生活の中での様々な感情の表現を通じて、自分の気持ちに気付くようになる時期であることを認識し、子どもの思いに沿った言葉をかけている。	
15	子どもが自分の力でやり遂げる充実感などに気付くよう見守り、適切な援助をしている。	
16	発見や心が動く経験が得られるよう、様々な感覚を働かせることを楽しむ遊びや、素材を用意するなどの工夫をしている。	



## 工) 3歳以上児

3歳以上児の時期は、運動機能がますます発達し、様々な遊びに挑戦して、活発に遊ぶようになります。生活習慣においても一日の流れを見通しながら、身の回りのことなども自分から進んで行うようになります。また、理解する語彙数が急激に増加し、知的興味や関心も高まり、集団的な遊びや協同的な活動も見られるようになります。そのため、この時期は子ども一人一人の自我の育ちを支えながら、集団としての高まりを促す援助が必要になります。

3歳以上児の保育内容は、乳児期の3つの視点、1歳以上3歳未満児の保育の5つの領域と、発達的な連続性をもったものです。

個の成長と集団としての活動の充実を図ることを基本とし、遊びや生活などの子どもが身近な環境に主体的に関わる具体的な活動を通して、各領域の内容を総合的に展開し、幼児期にふさわしい経験と学びを生み出すように援助することが必要です。

また、基本的な生活習慣を確立しつつあり、身辺自立の進む3歳以上児であっても、「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容が保障されることは不可欠です。

遊びの中で子どもが発達していく姿を「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」を念頭に置いて捉え、それらを考慮して保育の計画・実践・振り返りを実施し、子どもが発達に必要な経験が得られるようにすることが求められます。実際の指導では「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」が到達すべき目標ではないことや、個別に取り出して指導するものではないことに十分留意する必要があります。

1	自ら体を動かそうとする意欲が育ち、十分に体を動かす気持ち良さ、楽しさを体験できるよう、子どもの興味や関心に応じて全身を使った活動を取り入れている。	
2	自分の体を大切にしようとする気持ちが育つよう、適当な休息や水分補給、汗の始末や衣服の調節等への働きかけをしている。	
3	食の大切さに気付き進んで食べようとする気持ちが育つよう、子どもが楽しく食べられる雰囲気づくりや食べ物への興味や関心を高める活動を取り入れている。	
4	生活に必要な習慣を身に付け、次第に見通しをもって行動できるよう、自分でやり遂げたという満足感が持てる主体的な活動が展開されている。	
5	危険な場所や危険な遊び方がわかり、適切な行動が身に付けられるような活動を取り入れている。	

6	試行錯誤しながらやり遂げる達成感や、自分の力でやることの充実感を味わうことができるよう、子どもの行動を見守りながら適切な援助をしている。	
7	自分の良さや特徴に気づき、自信をもって行動できるよう、集団生活の中で子どもが自己発揮し保育士等や他の子どもに認められる体験ができる機会がある。	
8	他の子どもと試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現する喜びを味わうことができるような活動を取り入れている。	
9	他の子どもとの関わりの中で他人の存在に気づき、相手を尊重する気持ちをもって行動できるよう、様々なやり取りや葛藤を体験できるようにしている。	
10	きまりの必要性に気づき、自分の気持ちを調整する力が育つよう、お互いの思いを主張し、折り合いをつける体験を取り入れている。	
11	高齢者をはじめ地域の人々などに親しみをもち、人と関わることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるような体験を取り入れている。	
12	子どもが自然との関わりを深めることができるよう、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を取り入れている。	
13	動植物に対する畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探求心などが養われるよう、自然との出会いの機会をもっている。	
14	日常生活の中で、様々な文化や伝統に触れ、親しむ機会をもっている。	
15	言葉での伝え合いができるよう、友達同士で自由に話せる環境を構成し、子ども同士の交流が図られる機会をもっている。	
16	自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じたりする活動をしている。	
17	日常生活の中で数量や文字などを使いながら、自分の考えを表したり伝え合ったりする活動をしている。	
18	様々な表現を楽しめるよう遊具や用具を整え、色々な素材を使った表現の仕方に親しむ活動をしている。	
19	小学校の生活に見通しがもてるように、小学校への訪問や、小学生と交流する機会を設けている。	

20	保育園から小学校への移行を円滑にするために、アプローチカリキュラムに沿った保育を展開している。	
21	子どもに関する情報共有のために、一人一人の子どものよさや全体像が伝わるように工夫し保育要録を作成、就学先の小学校へ送付している。	
22	子どもの育ちをそれ以降の生活や学びへと繋げられるよう、就学先の小学校教員との話し合いなど、顔の見える連携を図っている。	

